

JF大分 水産おおいだ

発行元
大分県漁協

密輸防協力で署名式



密輸防止協力覚書署名式

門司税関大分税関支署と県漁協による密輸防止協力に関する覚書の署名式が2月6日に水産会館で行われた。これは2003年に結ばれた内容を改正し、再締結したものである。今後予定されるラグビ

水産研究発表・講演会

大分県農林水産研究指導センター水産研究部と

浅海・内水面グループによる平成30年度研究発表会が1月24、25日に水産会館で開催された。研究発表項目は、潮間帯を利用したマガキ天然採苗技術の現地実証、アサリ人工種苗生産における低塩分飼育法の有効性の検証と大型水槽への応用、マシハタ種苗生産への挑戦、ブラ早期種苗生産と人工種苗の可能性、バラメおよびブリ養殖場からの主要病原体検出の試み、緑色LED光の使用によるヒラメ養殖期間短縮の可能性2、天分県のブリ養殖におけるワクチンと抗菌剤の使用実態、アユの不漁を防ぐ環境条件とは、漁獲量と河川水温の関係、養殖魚およびカシニア

ミキモトイに及ぼす高濃度酸素供給の影響、次世代型多項目水質計を活用したカシニアミキモトイ赤潮監視体制のスマート化への取組、豊後水道南部におけるサハ類の漁獲動向、豊後水道におけるクルマエビの小型化についてである。また特別講演として、海洋科学高校生松尾彪さんらによる実習製品の魅力化UP作戦、知的財産に関する学習があった。

第1回ハモ漁業者検討会

1月26日にハモ漁業者検討会が発足した。議題は天分県におけるハモ漁獲の現状と今後の方向性についてであった。

ハモの漁獲は、国内では減少傾向にあるが、瀬戸内海では増加傾向にある。本県の漁獲量は全国5位となっている。検討会では、まず水産

研究センターによる天分県海域におけるハモの生態的特徴についての調査、研究事例の紹介後、県水産振興課からこの資源を持続するためには早急に生態を解明し適切な管理手法を定める必要があるとの提案があった。これに対し、県の示した方向で議論を進めていくことが決定した。



第1回ハモ漁業者検討会

当会の検討委員は、中津支店 園日出夫氏、連営委員(長)、宇佐支店 渡邊英敏氏、小底協議会(長)、安岐支店 木村涉氏、杵築支店 魚屋徳幸氏、池田雪男氏、堀靖昭氏、日出支店 中山公夫氏、連営委員(長)、別府支店 末政重美氏、大分

支店 小野淳氏、副連営委員(長)、臼杵支店 亀井金光氏、佐伯支店 清家博幸氏、本店 日隈で、あと県行政・研究機関職員と県協本店・支店職が参加している。

サワラの資源管理

平成30年度第2回サワラ瀬戸内海系群資源管理漁業者協議会が2月21日に神戸市で開催された。サワラ瀬戸内海系群の資源水準は、低位、横ばい、若齢主体、大型、早熟との報告が瀬戸内海区水産研究所からあった。大分県における30年秋漁(7~11月)のサワラ漁獲量は60.9トンで、昨年の54%と減少した。このうちサワラは53.6トン、サゴシは7.3トンであった。海域別の年間漁獲量は、伊予灘で54.5トン、周防灘では6.3トンであり、約9割が伊予灘で漁獲された。

隣県の愛媛県での漁獲は4~11月に132トンで昨年度を下回った。秋漁(8~11月)の海域別では燧灘・安芸灘で2.8トン、伊予灘では26.7トン漁獲されている。福岡県では2.3トンと昨年を大きく下回ったとのこと。

編集後記

九州の花粉飛散量は前シーズン並み。ピークは、スギは2月下旬~3月上旬、ヒノキは3月下旬~4月上旬と予測されている。万全な対策でシーズンを乗り切りましょう。